

第50期（2004年4月期）日本語研修コース

鹿 島 央

本学の日本語研修コースは、名古屋大学への進学生が主であるが、最近の傾向としては、近隣の公私立大学へ進学する留学生も増えている。今回は23名の国費留学生のうち、6名が他大学への進学生である。

1. 研修生

A. 大使館推薦（研究留学生）

文部科学省より配置された大使館推薦の国費研究留学生は、14ヶ国23名で、進学先は名古屋大学17名、滋賀大学、愛知教育大学、愛知大学、名古屋市立大学、南山大学、藤田保健衛生大学がそれぞれ1名であった。今回、名古屋大学進学者のうち2名（ブラジル：国際言語文化研究科、英国：理学研究科）は、レベルが高かったため全学向けの日本語講座を受講した。

B. 学内公募（私費留学生）

学内からは法学研究科2名（ブラジル、カンボジア）、国際言語文化研究科1名（ベルギー）、工学研究科8名（イラン、インドネシア、エジプト、中国4名、ベトナム）の合計11名受講申し込みがあり、面接と筆記試験の結果、全員について受講を認めた。今回は学内推薦のうち7名が既習者であったが、大使館推薦の学生の既習レベルと同程度であったため受け入れることとした。

以上のように、第50期は研究留学生23名、学内推薦留学生11名の合計34名で、既習者が12名（うち2名は全学向け日本語講座）、未習者が22名であった。なお、全学向け日本語講座を受講していた大使館推薦の留学生1名は、家庭の事情により、6月初旬に研修生を辞退した。

2. クラス編成

授業は、5クラス編成とし、専任教官2名、非常勤講師11名の計13名が担当した。クラスは既習者のために特別クラスを2つ設け、残り3クラスを初級者とし

た。ただし、未習クラスにも多少学習経験のある学生もいたためコース最初で授業内容を変更したが、最終的には履修内容は他の未習者とほぼ同じものであった。

3. 時間割と日程

授業は月曜日から金曜日まで、午前8時45分から午後2時30分まで90分授業を3コマ、さらに火曜日を除く毎日午後4時15分まで個人的な質問、会話練習による復習などの個別学習を行った。

コースの日程は以下の通りである。

4月13日開講式、4月14日授業開始、夏季休業7月22日～8月27日、8月30日授業再開、9月14日修了式。夏季休業中、希望者は全学向け夏季集中日本語講座（7月26日～8月10日）を受講した。

4. カリキュラム

1) 初級学習者（3クラス）

カリキュラムは、これまでのように主教材 *A Course in Modern Japanese [Revised Edition], Vols. 1 & 2*（名古屋大学日本語教育研究グループ編）を中心とする授業、*Topic Oriented Program*、専門について話す、の3つで構成した。以下に、概要について報告する。

1) 未習者

教科書を中心とする授業（1～14週）

夏休み前に主教材である *A Course in Modern Japanese, Vols. 1 & 2*が終了するようなカリキュラムを編成した。

・ドリル（各課の文法練習）

・Dialogue（会話）

・Discourse Practice & Activity

会話の運用練習として各課の Discourse Practice にもとづいて口頭練習を行った。また、まとま

りのある話をする練習として、先期と同じテーマ（「たのしかったこと」「趣味について」「国の観光地」「国との違いについて」）について原稿を書いてから話す活動を行った。また、日本人ゲストにインタビューする活動も2度行った。

- ・書く練習

話す練習と融合させる形で書く練習を行なった。

- ・読む練習

話す活動と連動するように行った。

- ・Sound Practice

アクセントとリズムを同時に導入・練習する方法を行っている。

- ・ホームビジットプログラム

ホームビジットプログラムを第12週目の土、日に実施した。訪問の日の前に、教室活動として電話のシミュレーション練習や実際に訪問家庭に電話することも行っている。訪問後には教室でレポートをし、訪問家庭へのお礼の書状も学生自身が書くことになっている。学生にはおおむね好評な活動である。このプログラムは、名古屋国際センターのご協力と非常勤の先生にお力添えをいただいている。

TOP (Topic Oriented Program) (第15週)

CMJ20課終了後、夏休み後の5日間にわたってTOPプログラムを実施した。TOPはトピックを決めて、これまでに学習した項目を活用して4技能を総合的に伸ばすことを目的にした活動である。第47期からは「国について聞く」という共通のトピックのもとで、日本人にインタビューし、留学生の国について、日本人がどのような知識があるか、どのようなイメージをもっているかなどを調査する活動としている。活動では、インタビューの仕方、結果の発表の仕方などを学び、資料などを用いて発表した。

「専門について話す」(第16週)

個別指導を行った後、各留学生の専門領域について発表した。発表は201教室、206教室の2クラスにわかれて行った。

2) 既習者(2クラス)

既習者10名を2つのレベルに分けて特別のクラスを

設けた。1つは、初級前半修了程度の日本語力がある5名、他の一つは初級後半修了程度の5名である。カリキュラムは、教科書『A Course in Modern Japanese [Revised Edition], Vols. 1 & 2』、『現代日本語コース中級I』(名古屋大学日本語教育研究グループ編)を中心とする授業、TOP、専門について話す、の項目で構成した。

の教科書を中心とした授業は、初級前半修了生については、Vol. 1の復習を最初の3週間で終了し、11週目の後半でVol. 2が終わるような進度であった。その後、『現代日本語コース中級I』に進み、3分の2程度までカバーした。初級後半修了生については、Vol.2を7週目後半までで修了し、その後、『現代日本語コース中級I』に入り、夏休み前までに終了した。さまざまな活動については、未習クラスと同様のことを行った。

TOPプログラムは、初級前半修了生については初級レベルの学生と同じトピックで行った。初級後半修了生については、「名古屋港水族館」「名古屋役所」「東山動物園」「愛知県警」にインタビューにでかけた。このうち「愛知県警」には学生の都合で出かけられず、キャンセルした。

専門については、他の学生と同じように行った。

5. まとめと問題点

1) 研修期間中に、何らかの理由で日本語習得に集中できないため、日本語学習と専門が両者ともにおろそかになる事例はこれまでも述べてきた。今回も、家庭の事情のため研修コース自体をやめなければならなかった留学生がいた。研究上の理由もあったようであるが、事前の指導教官との打合せの不足も感じた。辞退理由については、国際課に文書として残してある。

他に理由は、入試、ゼミへの出席、身体的な不具合、学習発達障害であった。

2) 研修コースは、集中度の高いコース(週15コマ)であり、かなりの予習と復習が必要である。今回は学内公募で受講した私費留学生の場合、ゼミなどの出席で欠席が多かった。これについては、指導教官ともお話しをし、文書での事情説明もいただいた。